

三木市

志染中梨木遺跡

—（主）三木三田線 道路事故防止対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



兵庫県文化財調査報告
第511冊

令和2年3月

兵庫県教育委員会

令和2年（2020）年3月

兵庫県教育委員会

三木市

志染中梨木遺跡

— (主) 三木三田線 道路事故防止対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和2年(2020)年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は兵庫県三本市志染町志染中に所在する志染中梨木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、(主)三木三田線道路事故防止対策事業に伴うもので、北播磨県民局加東土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館および公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
3. 調査の推移
(発掘作業)
確認調査　平成28年6月17日
実施機関：兵庫県立考古博物館　総務部埋蔵文化財課
本発掘調査　平成28年12月12日～19日、平成30年1月31日～2月1日
実施機関：兵庫県立考古博物館　総務部埋蔵文化財課、事業部加西分館事業課
(出土品整理作業)
平成31年（令和元年）4月1日～令和2年3月31日
実施機関：兵庫県立考古博物館
公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
4. 本書の編集・執筆は、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　村上泰樹と藤原玲史が担当し、第3章第2節を村上が、それ以外の執筆と編集を藤原が行った。
5. 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
6. 本書に使用した写真的うち、遺構については調査員が撮影したもの、遺物写真については国際文化財株式会社に委託して横山亮氏が撮影したものを使用した。
7. 本書で使用した方位は第V系国土座標（世界測地系）を基準とし、北は座標北をさす。標高は東京湾平均海水準を基準とした。
8. 遺物番号は本文・挿図・写真とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。また、遺物番号のうち、石製品には番号の前に「S」を冠し、種類ごとに通し番号としている。
9. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにしている。
10. 本書に掲載した挿図のうち、第2図は兵庫県遺跡地図をもとに作成した。また、第3図は三本市基本図（1/2,500）図郭「45-2 平井山」「45-4 吉田」「46-1 井上」「46-3 窯屋」をもとに作成した。写真図版1の航空写真については国土地理院が1964年に撮影したもの（M KK644X-C2-3）を使用した。
11. 報告書の作成にあたり、三本市教育委員会　金松誠氏に御協力を得た。記して感謝の意を表します。

目 次

第1章 遺跡をとりまく環境	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	2
1. 志染中梨木遺跡周辺の遺跡	2
2. 志染中梨木遺跡周辺の地形と遺跡の立地	4
第2章 調査の経緯・経過と体制	
第1節 発掘調査に至る経緯と経過	6
1. 分布調査	6
2. 確認調査	6
3. 本発掘調査	6
第2節 出土品整理作業の体制	8
第3節 志染中梨木遺跡の過去の調査について	8
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	9
1. 遺構の概観	9
2. 個別遺構	12
第3節 遺物	15
1. 遺構出土遺物	15
2. 包含層出土遺物	17
第4章 まとめ	
第1節 志染地域の古墳時代	18
1. 集落の動向	18
2. 古墳の動向	18
第2節 土倉前後の志染中梨木遺跡とその周辺	20
1. 志染地域周辺と志深屯倉	20
2. 志染中梨木遺跡と志深屯倉	21

挿図目次

第1図 志染中梨木遺跡の位置	1	第10図 SK01・SK02・SD01・SX01・SX02	
第2図 志染中梨木遺跡周辺の遺跡	3	土層断面図	13
第3図 志染中梨木遺跡と周辺遺跡の立地	5	柱穴 土層断面図	14
第4図 調査位置図	7	遺構出土遺物	16
第5図 調査区の配置	7	包含層出土遺物	17
第6図 三木市の調査で検出された遺構	8	第14図 志染中梨木遺跡とその周辺	19
第7図 調査区および土層断面図	10	第15図 美嚢郡における集落・古墳の変遷と『風土記』	
第8図 遺構配置図	11	第16図 屯倉前後の志染中梨木遺跡とその周辺	
	12		19
			21

写真目次

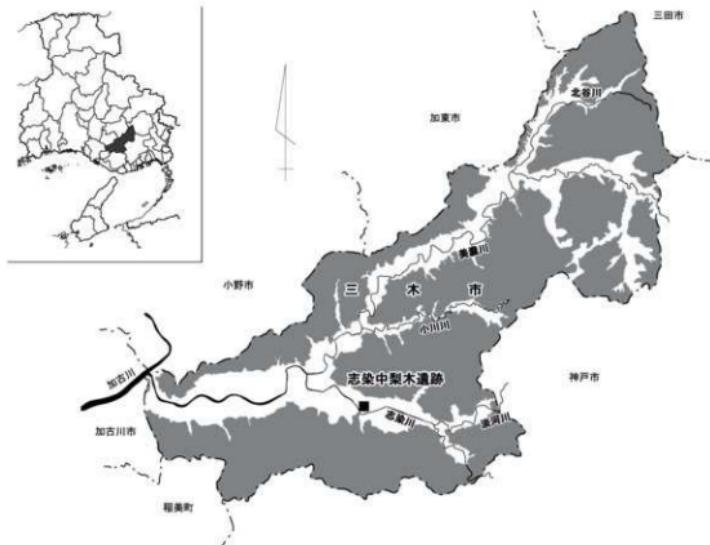
写真図版 1	遺跡周辺の航空写真（1964年）	写真図版 7	D地区全景（南東から）
	志染中梨木遺跡周辺 遠景（北東から）		D地区 SH02東肩 土層断面（南東から）
写真図版 2	調査前状況（2016年）（南西から）		D地区 P24・P25 土層断面（南から）
	調査前状況（2017年）（南西から）	写真図版 8	C地区全景（南西から）、C地区 土層堆積状況（南から）
	歩道完成後状況（2019年）（南西から）		E地区全景（東から）、E地区 SX02検出状況（南から）
写真図版 3	A地区全景（西から）		F地区全景（南東から）、F地区 北壁土層断面（南から）
	A地区 北壁土層断面（南西から）	写真図版 9	
写真図版 4	A地区 東壁土層断面（南西から）		A地区 SD01全景（北西から）
	A地区 SH01全景（北から）		A地区 SK01土層断面（西から）
	A地区 SH01土層断面（南西から）		A地区 SK02検出状況（南から）
写真図版 5	B地区全景（西から）		A地区 SK02土層断面（南から）
	B地区 柱穴群検出状況（東から）		A地区 P5・P6 検出状況（北から）
写真図版 6	B地区 SH02・SH03土層断面（南東から）		A地区 P5・P6 半裁状況（北西から）
	B地区 SH02全景（西から）		B地区 P9 半裁状況（南から）
	B地区 SH02土層断面（南から）		B地区 P22半裁状況（南から）
		写真図版10・11	
			遺構出土遺物（1）・（2）
		写真図版12	
			包含層出土遺物

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

志染中梨木遺跡は、兵庫県南東部の内陸に市域をもつ三木市の南部、三木市志染町に位置する。三木市は播磨地域の南東部に位置しており、東から南を神戸市、南西を加古郡稲美町、西を加古川市、北西を小野市、北を加東市、そして北東を三田市と接している。市域はほぼ、旧播磨国美嚢郡の範囲に相当する。三木市の東部には帝釈山地、更には六甲山地が広がり、これらに水源を発した河川が西側へと流れ、市域の西部に向かって台地や平野が広がる。市内には、北東から南西へと美嚢川が流れる。美嚢川は、西流する小川川や志染川と合流しながら加古川へと注ぎ、瀬戸内海に流れ出る。志染中梨木遺跡の南を流れる志染川は、六甲山地に水源を発し、裏六甲を西流しながら三木市域へに入る。呑吐ダムによって堰き止められた志染川はつくはら湖を形成し、再び北西へと流れ出す。志染町御坂で淡河川と合流して西へと流れた後は、三木市久留美で美嚢川へと注ぐ。市域の台地と丘陵は、西流するこれらの河川によって大きく6つの地域に分けられ、それぞれの河川の流域には谷底平野と段丘が形成されている。

遺跡の位置する志染町は三木市の南部域を占めており、町の中央を志染川が東から西へと流れる。志染川の北には細川丘陵、南には志染丘陵が広がり、両丘陵から志染川に向かって小河川が流れることで、丘陵の縁には開析谷が形成されている。東西に流れる志染川の両岸には河岸段丘が形成され、遺跡は志染川北岸の段丘上に立地している。



第1図 志染中梨木遺跡の位置

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

1. 志染中梨木遺跡周辺の遺跡

遺跡の所在する志染町付近では、古くは縄文時代中期から遺跡の存在が確認できるが、遺跡数が増加し、人々の活動が顕著に見られるようになるのは弥生時代中期後半以降である。古墳時代になると、当地における人々の活動は活発化し、消滅したものも含めると80基以上の古墳が築造されたとされている。また、「日本書紀」『播磨國風土記』には、後に天皇に即位するオケ・ツケの二王子が縮見屯倉首忍海部造細目のもとに身を隠したという伝説が残されており、当地に屯倉が置かれていたことを窺い知ることができる。また、古代には郡衙が置かれたと考えられている。

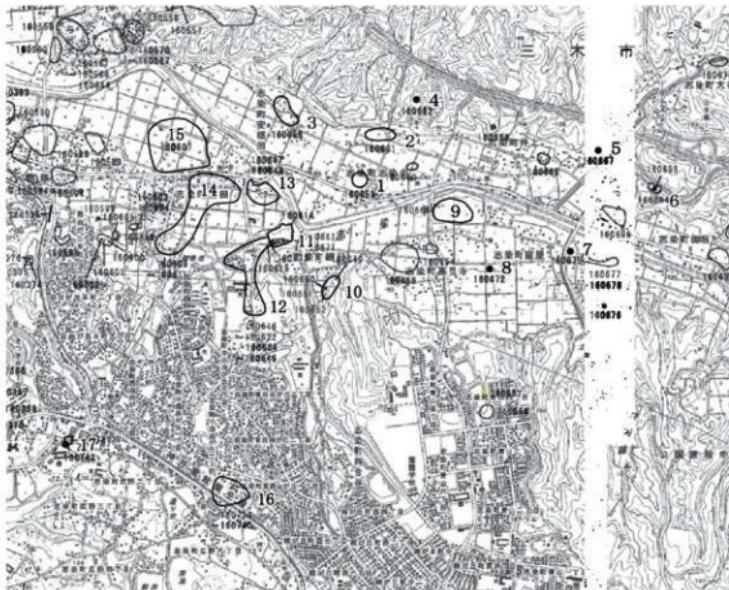
以下に、本報告の中心となる古墳時代における周辺の遺跡と、屯倉や郡衙が置かれたとされる古代の時期に該当する周辺の遺跡について詳述する。

古墳時代

古墳時代の集落は志染中梨木遺跡（1）の他に、窟屋藤木遺跡（9）、東吉田遺跡（13）第2地点、吉田南遺跡（14）第3地点で竪穴住居跡が検出されている。また、さらに西の淡河川沿いでは、小戸田遺跡や戸田井ノ姿々遺跡でも竪穴住居が検出されている。

志染町に所在する古墳のほとんどは志染川の南側に築かれており、志染川の北側では志染中1号墳（4）と井上1号墳（5）が知られるのみである。いずれも未調査のため詳細は明らかとなっていないが、ともに径十数mの円墳である。

古墳の大半が築かれている志染川の南側では、窟屋1号墳（7）、窟屋扇ノ坂古墳（8）、細目古墳群（10）、吉田住吉山古墳群（11）、吉田古墳群（12）が知られている。窟屋1号墳は、志染川南岸の段丘上に築かれた6世紀後半の古墳である。古墳は長径18m×短径16m前後の円墳で、横穴式石室を埋葬施設にもつ。石室内からは、金銅製環頭大刀柄頭・馬具・鉄鎌・鉄釘・耳環などの金属器、須恵器や土器が出土しており、出土した遺物の特徴から被葬者は屯倉の管理者が想定されている。なお、現存していないが窟屋1号墳の隣接地にも古墳が存在し、土取りの際に大刀などの鉄製品が出土したとされる。窟屋扇ノ坂古墳も同様に、志染川南岸の段丘上に築かれた円墳である。墳丘は削平を受けているが、残存部や周溝から径約10mの規模であったことが明らかとなっている。埋葬施設は横穴式石室で、石室内からは古墳時代後期の須恵器、鉄刀、耳環・管玉・ガラス玉などの装饰品が出土している。細目古墳群は、志染川が北西へと流れを変える屈曲点に合流する細目川の東岸に位置する。尾根上に築かれたこの古墳群は、4基の円墳からなる。発掘調査は行われていないが、2号墳は横穴式石室を埋葬施設とし、2号墳か3号墳のどちらかから珠文鏡が出土したことが記録されている。吉田古墳群および吉田住吉山古墳群は、志染川が北西へと流れを変える屈曲点へとのびる尾根上に築かれており、弥生時代から古墳時代の墳墓・古墳があわせて43基が確認された。志染川南岸の段丘から更に丘陵をこえた南側では、野々池古墳群（16）や武塚古墳群（17）、広野古墳群が築かれている。野々池古墳群では7号墳が全長20.8mで二重の周溝をもつ帆立貝式の前方後円墳であり、武塚古墳群では2号墳が前方後円墳であったとされている。



第2図 志染中梨木遺跡周辺の遺跡

表1 志染中梨木遺跡の遺跡

1	志染中梨木遺跡	7	窟屋1号墳	13	東吉田遺跡
2	志染中中谷遺跡	8	窟屋扇ノ坂古墳	14	吉田南遺跡
3	安福田蔵町散布地	9	窟屋藤木遺跡	15	吉田遺跡
4	志染中1号墳	10	細目古墳群	16	野々池古墳群
5	井上1号墳	11	吉田住吉山古墳群	17	武塚古墳群
6	法難遺跡	12	吉田古墳群		

古代

当地は「志深屯倉」の存在が記録されているものの、古代の遺跡の発掘例が少なく、その実態はあまり明らかとなっていない。こうした中、志染中中谷遺跡（2）では、坪掘りによるグリッド調査ながらも奈良時代の墨書き器をはじめ、唐草文軒平瓦や漆塗土器などが出土しており、周辺に屯倉や美義郡衙が存在したと考えられている。また、志染中中谷遺跡の西には安福田蔵町散布地（3）が周知されており、その字名から屯倉跡の可能性が指摘されている。

志染川と淡河川の合流点付近では、法難遺跡（6）で7世紀末から8世紀初頭に操業された土師器窯が見つかっている。また、淡河川を少し遡ると、北岸の段丘上に戸田遺跡や戸田前田遺跡が分布しており、これらの遺跡では掘立柱建物が検出され、戸田前田遺跡からは綠釉陶器が出土している。

2. 志染中梨木遺跡周辺の地形と遺跡の立地

右の図（第3図）は、志染中梨木遺跡の周辺の微地形を1/2,500の都市計画図から復元したものである。図の西半は圃場整備前の地図から微地形を復元しているが、東半は圃場整備後の地図から復元しているため、描き出される地形には、東西である程度の誤差が生じている。また、遺跡の範囲は兵庫県遺跡地図（2011年版）をもとにプロットした。なお、遺跡の番号は表1に対応しており、黒字が古墳時代、白字が古代の遺跡である。

志染中梨木遺跡の位置する志染川北岸では、南岸のように志染川へと注ぐ小河川は現在まで残されていないが、微地形と谷地形を堰き止めて作られた溜池から、本来は幾本もの小河川が志染川へと注いでいたことがわかる。また、志染川南岸と比較して傾斜地の多い北岸では、遺跡の立地する段丘部分が安定した平坦面を確保することのできる数少ない場所であったと考えられる。

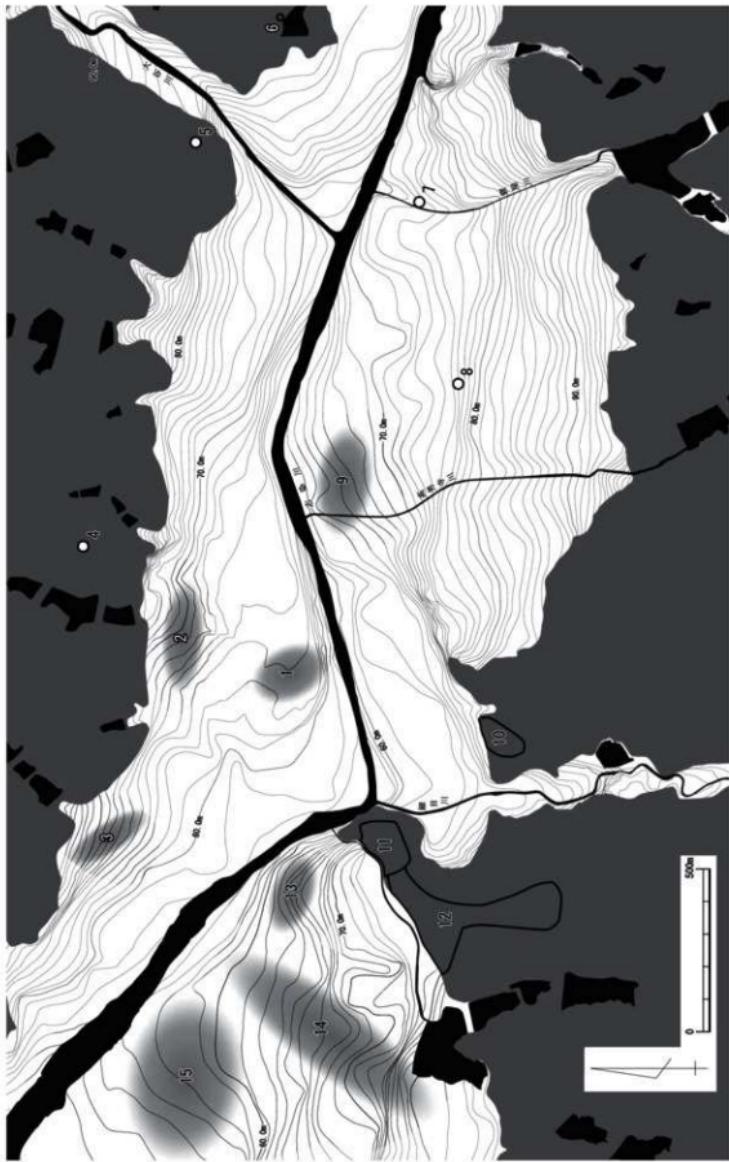
志染中梨木遺跡（1）周辺の同時期の遺跡は、対岸の窟屋藤木遺跡（9）をはじめ東吉田遺跡・吉田南遺跡・吉田遺跡（13～15）が挙げられる。これらの遺跡は志染川にほど近い低位段丘上に立地しており、古墳時代の集落の立地を知ることができる。

一方で、志染中谷遺跡（2）や安福田藏町散布地（3）に見られる古代の遺跡は、丘陵裾部の扇状地上に立地しており、古墳時代と古代とで遺跡の立地に差が見られる。古墳時代には志染川の両岸で遺跡が見られていたのに対し、現在明らかとなっている古代の遺跡は志染川北岸に集中しており、この時期の土師器窯が見つかった法難遺跡（6）もまた北岸に位置している。

周辺に所在する古墳は、多くが丘陵の尾根上に築かれているが、窟屋1号墳（7）と窟屋扇ノ坂古墳（8）は平地に築かれている。窟屋1号墳は窟屋川と志染川との合流点付近へと丘陵からのびる傾斜地の先端に築かれているといえる。また、窟屋扇ノ坂古墳は丘陵から続く傾斜地と段丘との境界に築かれていることがわかる。なお、窟屋1号墳の石室は開口方向を南西に、窟屋扇ノ坂古墳の石室は西向きにもち、ともに丘陵からの傾斜に対して左向きに石室が開口している。

【参考文献】

- 池田征弘編 2009 「窟屋1号墳」（『兵庫県文化財調査報告』第353冊）兵庫県教育委員会
岡安光彦・遠竹陽一郎 2000 「高木古墳群・高木多重土塁1」（『三本市文化研究資料』第15集）
三本市教育委員会
山田清朝編 2011 「吉田住吉山遺跡」（『兵庫県文化財調査報告』第409冊）兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会 2011 「兵庫県遺跡地図」
松村正和・小網豊 2000 「三本市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ」
（『三本市文化研究資料』第14集・「発掘調査概要報告」第2号）三本市教育委員会
三本市教育委員会 1986 「三本市埋蔵文化財調査概報」
三本市教育委員会 2001 「三本市遺跡分布地図」（『三本市文化研究資料』第17集）
三本市立みき歴史資料館 2018 「企画展「志染町の遺跡」鑑賞の手引き」



第3図 志染中梨木遺跡と周辺遺跡の立地 ($S=1/15,000$)

第2章 調査の経緯・経過と体制

第1節 発掘調査に至る経緯と経過

1. 分布調査

北播磨県民局加東土木事務所が三木市志染町志染中において計画する三木三田線歩道整備事業の工事対象となる範囲の隣地では、既に遺跡の存在が周知されていた（兵庫県遺跡地図：160659）。このため、兵庫県教育委員会が平成28年4月に分布調査（遺跡調査番号2016009）を実施した結果、古墳時代から中世前半期にかけての須恵器や土師器の散在が認められ、既に周知されている志染中梨木遺跡の範囲が事業対象地にまで広がる可能性が高まった。なお、分布調査の体制は下記の通りである。

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 上田健太郎

調査期間 平成28（2016）年4月12日

2. 確認調査

分布調査の結果を受けて、北播磨県民局長の依頼（平成28年6月3日付 北播（加土）第1155号）に基づき、平成28年6月17日に確認調査（遺跡調査番号2016087）が実施された。確認調査では、道路幅にかかる掘削予定箇所に幅1.5mのトレンチを4本設置し（T1～T4）、遺構の有無を確認した。調査の結果、T1～T3の3本のトレンチにおいて柱穴や土坑などの遺構が検出され、古墳時代の集落の存在が想定された。T4では明確な遺構が検出されなかったものの、地形や包含層の状況から遺跡の広がりが想定された。こうした状況から、既に古墳時代の集落として周知されていた志染中梨木遺跡の範囲が、当地にまで広がっていたことが明らかとなった。なお、確認調査の体制は下記の通りである。

開発事業名（主）三木三田線歩道整備事業

事業者名 北播磨県民局加東土木事務所

調査主体 兵庫県教育委員会

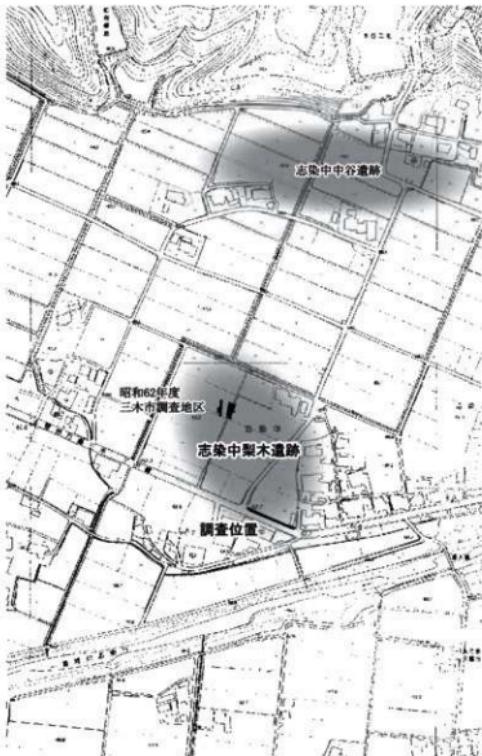
調査担当 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 上田健太郎

調査期間 平成28（2016）年6月17日

調査面積 12m²

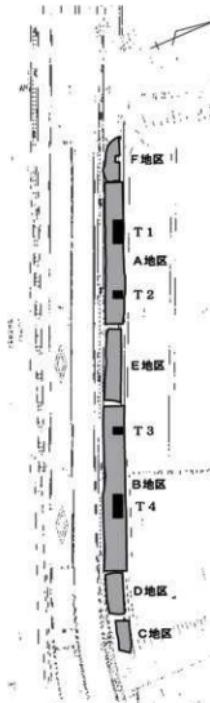
3. 本発掘調査

確認調査の成果を受け、北播磨県民局加東土木事務所との協議の結果、本発掘調査は平成28年度と平成29年度の2回に分けて行われることになった。平成28年度の調査は平成28年9月12日付 北播（加土）第12463号に基づき、先行して工事が行われる3地区（A～C地区）において同12月12日から19日にかけて調査が実施された。平成29年度の調査は平成29年10月13日付 北播（加土）第1528号の依頼に基



第4図 調査位置図

(S=1/6,000)



第5図 調査区の配置

(S=1/600)

づき、前年度の未発掘部分（D～F地区）について、平成30年1月31日および2月1日に調査が実施された。なお、本発掘調査の体制は下記の通りである。

【平成28年度】

開発事業名	（主）三木三田線道路事故防止対策事業
事業者名	北播磨県民局加東土木事務所
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当	兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財課 村上泰樹
調査期間	平成28（2016）年12月12日～19日
調査面積	87m ²

【平成29年度】

開発事業名	（主）三木三田線道路事故防止対策事業
事業者名	北播磨県民局加東土木事務所
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当	兵庫県立考古博物館 事業部 加西分館事業課 長濱誠司
調査期間	平成30（2018）年1月31日～2月1日
調査面積	28m ²

第2節 出土品整理作業の体制

志染中梨木遺跡の出土品整理作業は、平成31年（令和元年）度に実施した。出土品整理作業は北播磨県民局長から兵庫県教育委員会への依頼（平成31年4月1日付 北播（加土）第1042号）によるもので、兵庫県立考古博物館において公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが実施した。なお、出土品整理作業の体制は、下記のとおりである。

事業主体 兵庫県教育委員会

実施場所 兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1丁目1番1号）

整理担当 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

整理担当職員 （工程管理）深江英憲

（作業指示）藤原怜史

整理作業担当嘱託員（実測・トレース・レイアウト）平宮可奈子

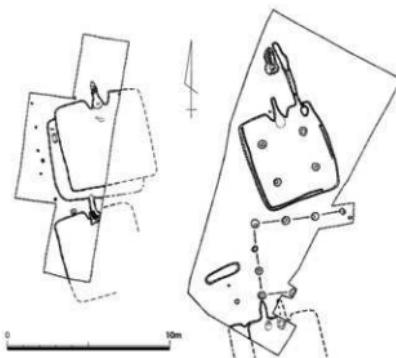
遺物写真撮影 国際文化財株式会社 横山亮

第3節 志染中梨木遺跡の過去の調査について

志染中梨木遺跡の調査は今回報告する調査以前に、三本市教育委員会が昭和62年度に志染地区県営は場整備事業に伴って発掘調査を実施している。今回の調査地点から約150m北西の場所に位置し、2ヶ所の調査区で計220m²の範囲が調査

されている。調査区からは、6棟の竪穴住居跡と1棟の掘立柱建物跡が検出されている。検出された竪穴住居跡はいずれも方形で、竪を備えている。住居の規模は、一辺5~6mを測る。掘立柱建物跡は調査区内で全容が明らかとはなっていないが、3×3間以上の建物が復元されている。出土した遺物の特徴から、6世紀から7世紀前半にかけて集落が営まれていたことが明らかとなっている。

*なお、調査内容については『三本市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』からの引用のほか、三本市立みき歴史資料館 金松氏からご教示いただいた。



第6図 三木市の調査で検出された遺構 (S=1/300)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

志染中梨木遺跡は三木市志染町志染中に所在する集落遺跡である。遺跡の南側には志染川が流れ、それによって形成された河岸段丘上に遺跡は立地している。現在、遺跡とその周囲は水田や畠などの耕作地となっている。調査対象地は、志染川の北側で主要地方道三木三田線（県道38号線）が南東方向から北東方向へ向かってゆるやかに屈曲する位置にあたり、歩道整備がなされる道路の北側、延長約70m、幅約1～3mの範囲である。

調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡や古代から中世にかけての柱穴などが検出され、志染中梨木遺跡の南縁部の実態が明らかとなった。

なお、本発掘調査が2年にわたって飛び地的に実施された都合上、調査区名や遺構番号が隣接する調査区と連続してない。原則として、報告する調査区名や遺構番号については調査当時のものを使用し、欠番や重複がみられた遺構番号については新たに番号を付している。

第2節 遺構

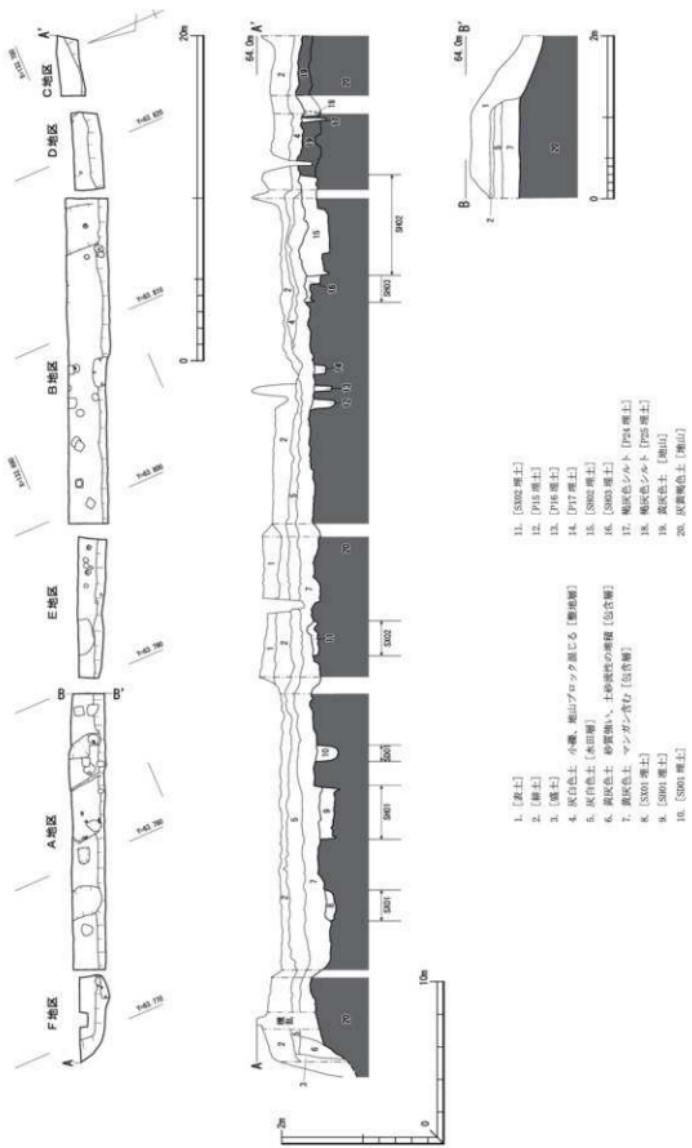
1. 遺構の概観

調査区の南側は道路に面しており、その影響を受け斜めに削られているため遺構の遺存状況は良くない。調査区の層序は、上層から表土（第1層）、旧耕作土（第2層）、盛土層あるいは整地層（第3・4層）、旧水田層（第5層）、遺物包含層（第6・7層）、地山層（第19・20層）となる。遺構は、A・B・E・F地区では遺物包含層（第7層）を除去した段階の地山面（第20層）で、C・D地区では整地層（第4層）を除去した段階の地山面（第19層）で検出した。

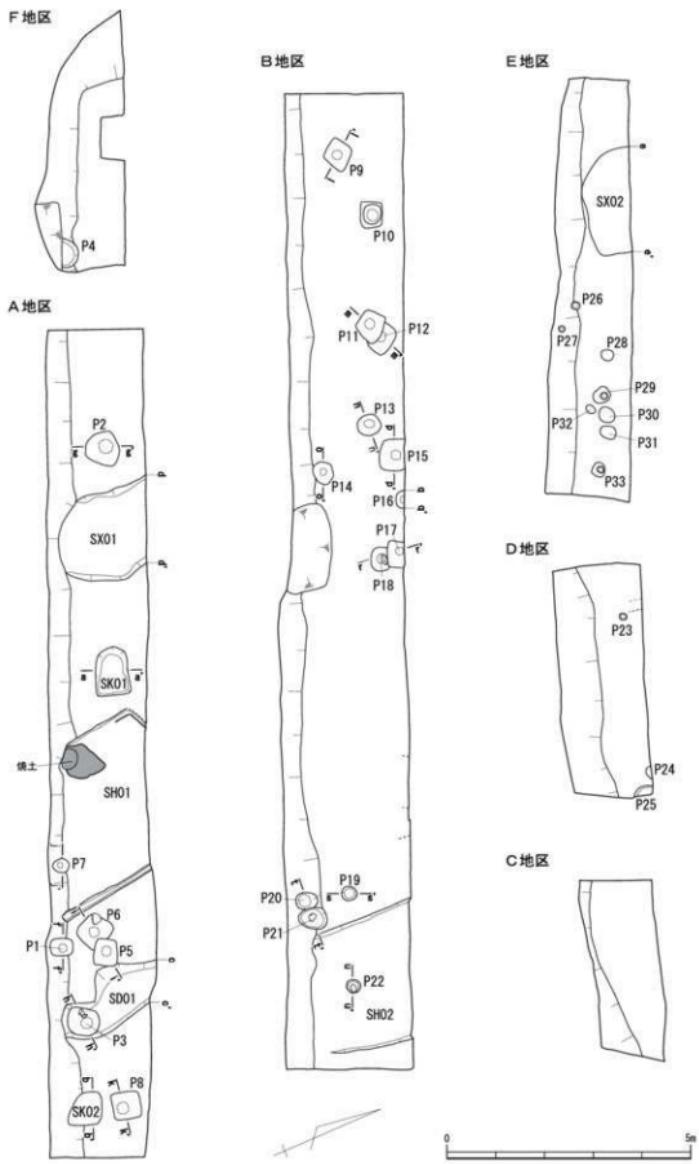
遺構は調査区東端部にあるC地区を除く全域に広がっている。A地区中央付近とB地区東端部では竪穴住居跡（SH01・02・03）3棟を確認したが、SH02・03については、遺構埋土と地山層の識別が困難で、結果的に土層断面の精査によってその存在が明らかになった。

C地区を除くほぼ全域で柱穴ないしは柱穴の可能性をもつ小規模のピットが分布している。柱穴群は平面形が方形のものと楕円形のものがある。方形の柱穴はA地区東端部とB地区西半部に集中して分布しており、この付近に方形の柱穴をもつ掘立柱建物が分布していると理解できる。

A地区東端部、竪穴住居跡（SH01）の東側にはSD01が南北方向にはしつっている。また溝の東側には土坑（SK02）が近接する。A地区の西側には浅いくぼみ状を呈するSX01、E地区には炭混じりの埋土をもつ浅いくぼみ状のSX02が存在する。



第7図 調査区および土層断面図 (S=1/300・1/60)



第8図 遺構配置図 (S=1/100)

2. 個別遺構

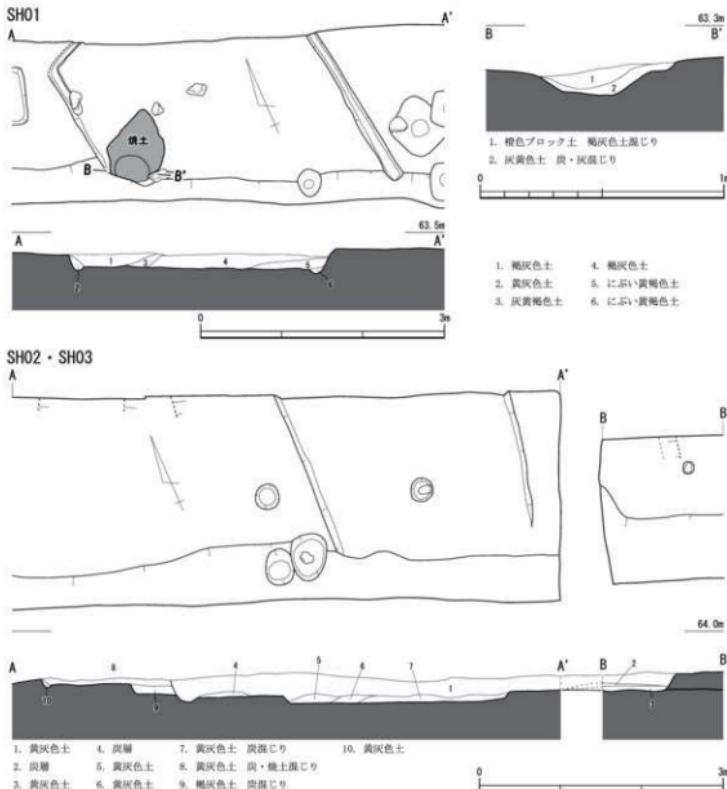
竪穴住居跡 (SH01~03)

SH01 A地区中央付近に位置する。周間に周壁溝が巡る方形の竪穴住居である。南端部および北端部は調査区外に及んでおり、規模等は不明な部分があるが、東西方向・南北方向3m前後の規模と推定できる。深さは15cmである。竪穴住居の南西側には、焼土面とその周囲に炭層を確認しており、炉跡と考えている。柱穴はない。

出土遺物は埋土中より須恵器壺（1）、甌（2）、土器飾壺（3～6）・碗（7）が出土している。

SH02・03 B地区東端部で2棟が重複して検出された。検出が困難で規模・構造を明らかにできなかつたが、土層断面の観察から2棟の竪穴住居が重複し、SH03を切り込んでSH02が構築されている。SH02は東側および西側にベット状の高まりをもち、周溝および柱穴をもたない竪穴住居と理解している。

出土遺物はなかった。



第9図 竪穴住居跡 SH01 および SH02・SH03 (S=1/60・1/20)

柱穴群 (P 1 ~ 33)

柱穴は平面が方形の掘方をもつ一群と平面形が円形ないしは梢円形の一群がある。前者はP1・3、P5・6、P8~12、P15、P17・18が該当する。この一群の柱穴はA地区の東端、およびB地区の西側に集中しており、この付近に方形の掘方をもつ掘立柱建物があると推定できる。方形の柱穴群の規模は1辺50~60cmで、深さは25cm前後、確認できる柱痕の大きさは径20~25cmである。出土遺物はP9内より須恵器壺蓋(12)が出土した。

後者の一群はC地区を除くほぼ全域で検出されたが、B地区およびE地区に集中する傾向がある。P2、P4、P7、P13~14、P16、P19~33が該当する。

直径50cm前後、深さ25~50cmの大型の柱穴はB地区に多く見られ、径20~30cm、深さ30cm前後のものはB地区の西側からE地区に集中している。小型の柱穴P22内には礎盤石が出土している。出土遺物はP24より須恵器片(13)が出土している。

この平面形が円形ないしは梢円形の柱穴の一群のうち小型のものは、包含層より中世遺物が出土していることを考慮すると、中世段階の掘立柱建物を構成する柱穴の可能性がある。

溝

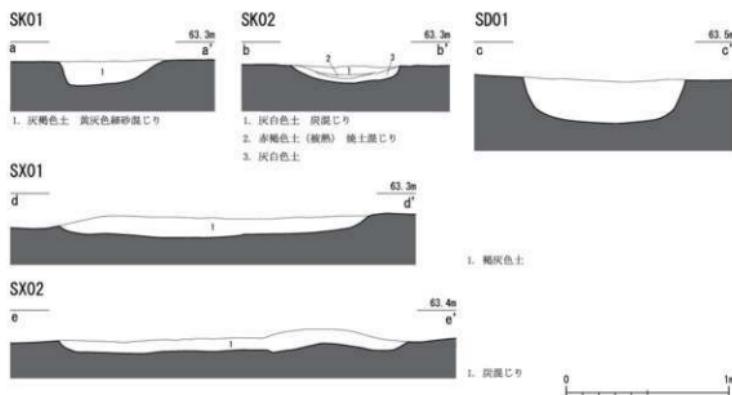
SD01 A地区東端部、SH01に近接して北から南方向に流れる溝 (SD01) である。幅50cmから1mの規模で南に向かって広がる。深さは約25cmである。

出土遺物はない。

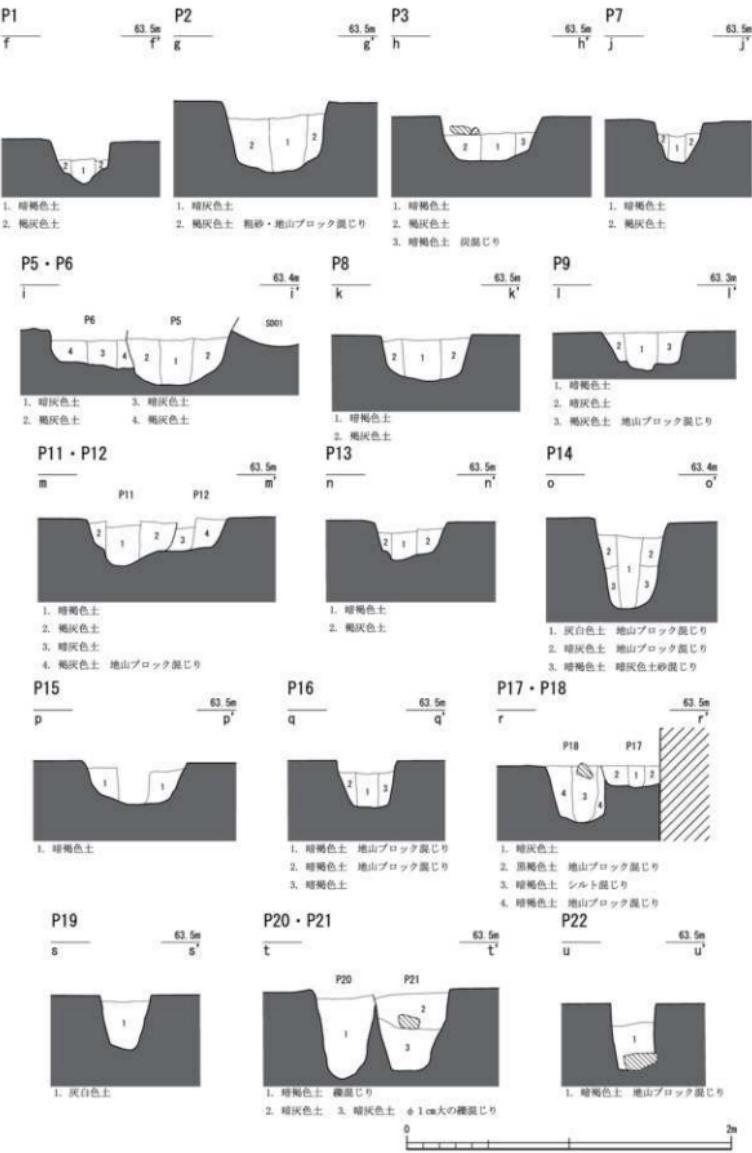
土坑 (SK01・02)

SK01 A地区中央付近に位置し、SH01に近接している。大きさ1×0.65mの直な土坑である。深さは11cmと浅い。遺物は須恵器の壺蓋(11)が出土している。

SK02 A地区東端部に位置する。埋土に炭と焼土片を含む土坑である。65×60cmの規模で、深さ10cm前後と浅い。底部は被熱により赤化しており、炉の可能性を持つ土坑である。出土遺物はない。



第10図 SK01・SK02・SD01・SX01・SX02 土層断面図 (S=1/30)



第11図 柱穴 土層断面図 (S=1/30)

その他

SX01 A地区西側に位置する。遺構の範囲は調査区外に及び全容は明らかではない。幅1.8m、深さは10cm前後と浅い。出土遺物はない。

SX02 E地区の西半部に位置する。炭化材が多量に混じった埋土をもつ土坑である。遺構の北側は調査区外に及んでおり全容は明らかではない。幅2m前後、深さ10cm前後と浅い。遺物はいずれも小片であるが、須恵器の短頭壺ないしは平瓶（8）・坏身（9）・高坏（10）が出土している。

第3節 遺 物

1. 遺構出土遺物

SH01出土遺物（1～7） 遺物はすべて、堅穴住居SH01の埋土から出土した。1は須恵器の壺である。大きく外反する頸部には突帯が2条以上巡り、その間には櫛描波状文が施される。なお、この壺と同一のものと考えられる、肩部外面にタタキをもち、その直下に頸部と同様の櫛描波状文を巡らせる破片も出土している。小片のため図化には至らなかったが、写真のみを写真図版10に掲載している。2は須恵器の壺である。底部内面は粗くなつてつけられ、外面はヘラ削りによって調整されている。3・4は土師器の小型壺である。5は土師器長胴壺の口縁である。外面はヨコナデ、内面はヨコハケによって調整されている。口縁端部は中央がわざかに凹む形状を呈する。6は土師器壺の底部と考えられる。底部はやや丸みをおびた平底状を呈し、底部から胴部へは屈曲をもつて立ちあがる。外面は底部・胴部ともにハケによって調整され、内面には強いユビナデの跡が残る。外面にはススの付着が認められる。7は土師器の碗である。底部はヘラ切りの後にナデが施されている。

SH01出土遺物は7を除き、図化に及ばなかった土器も含めて全てが古墳時代に属するものであり、遺構の形状も古墳時代の堅穴住居の様相を示していることから、7の土師器碗は後世に紛れ込んだものである可能性が高いと考えられる。

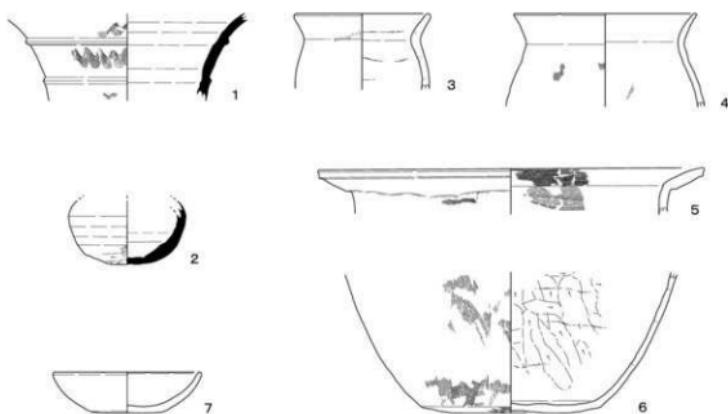
SX02出土遺物（8～10） 8は須恵器の短頭壺ないしは平瓶の頸部である。頸部は直線的に広がり、口縁端部は丸みをもつて仕上げられている。9は須恵器の坏身である。受部のごくわずかのみが残存している。10は須恵器高坏の脚部と考えられる小片で、脚端部は面をもたない。

SK01出土遺物（11） 11は須恵器坏蓋である。口縁部のみが残存し、復元径は約13cmを測る。

P9出土遺物（12） 12は須恵器坏蓋である。天井部のみが残存する。

P24出土遺物（13） 13は須恵器の碗あるいは鉢である。口縁部が残存するが、小片のため口径は復元できなかった。

SH01 出土



SX02 出土



SK01 出土



P9 出土



P24 出土



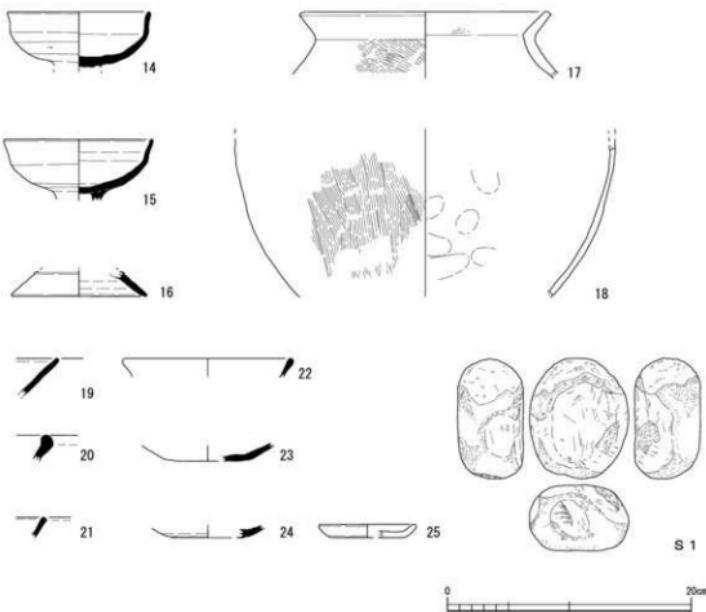
第 12 図 遺構出土遺物 (S=1/4)

2. 包含層出土遺物

古墳時代の遺物 (14~18) 14~16は須恵器の高坏である。14・15はF地区の南東隅付近の近接した位置で出土した。ともに無蓋高坏で、坏部はほぼ完存しており脚部は失われている。16は須恵器高坏の脚部と考えられる。17・18は土師器の長胴甕である。ともに摩滅が著しいが、胴部外面にタテハケが認められる。

古代から中世の遺物 (19~25) 19・20は須恵器の鉢である。21~24は須恵器碗で、23・24は底部が回転糸切によって切り離される。25は土師器の皿である。回転台成型によるものだが、底面が荒れているため糸切りかヘラ切りかは判断し得ない。

その他の時期の遺物 S 1は花崗岩を用いた磨石である。4面に擦跡が認められる。この他、A地区およびB地区の包含層からは弥生土器が出土しているが、小片のため図化には及ばなかった。いずれも外面にタキキをもつ弥生時代後期の甕であり、外外面とともに摩滅が著しい。



第13図 包含層出土遺物 (S=1/4)

第4章　まとめ

今回の調査では、堅穴住居跡3棟をはじめとした古墳時代の遺構が検出され、過去の調査で明らかとなっていた古墳時代後期の集落が段丘縁辺部にまで広がることが明らかとなった。当地は志深屯倉の遺称地であり、その最有力候補とされる志染中谷遺跡を背後にひかえていることからも、志染中梨木遺跡は志深屯倉へとつながる集落であったことは想像に難くない。最後に、古墳時代の志染地域の様相を整理し、志染中梨木遺跡に集落が営まれた時期と志深屯倉をとりまく背景から本遺跡の評価を行いまとめとしたい。

第1節 志染地域の古墳時代

1. 集落の動向

今回の調査で、志染中梨木遺跡は中期末から後期にかけての時期の堅穴住居が存在していたことが明らかとなった。過去の調査では、6世紀後半から7世紀前半にかけての集落の存在が明らかとなっていることから、志染中梨木遺跡には古墳時代後期から終末期を中心に集落が営まれたと言える。過去に三木市が実施した調査で検出された堅穴住居跡と今回検出した堅穴住居跡では時期がやや異なり、ベッド状の高まりや竈の有無など異なる特徴を見せるが、いずれも南北からやや西に傾いた軸をもつという点で共通する。遺跡の中で時代が下るにつれて、集落域が北へと移っていった可能性がある。

この時期、対岸の窟屋藤木遺跡や淡河川沿いの戸田井ノ姿々遺跡などで堅穴住居跡が見つかっており、志染川周辺での集落増加の様子が窺える。この時期を廻る集落としては、淡河川をさらに廻上したところに位置する淡河中村遺跡が挙げられ、韓式系土器の出土した住居から渡米人の関わった開発が指摘される。一方で、志染川両岸における集落の存在は明らかとなっておらず、古墳時代中期以前の集落は多くなかったものと考えられる。

現在明らかとなっている集落遺跡の動向をまとめると、志染地域では古墳時代中期頃から後期にかけて志染川沿岸の開発が進み、低位段丘上に集落が営まれていたといえる。

2. 古墳の動向

古墳時代、後に美義郡となる地域では、前期に全長約91mの前方後円墳である愛宕山古墳が築かれ、中期には短甲や鏡が副葬された年ノ神6号墳を含む年ノ神古墳群などが築かれる。これらの有力な古墳はいずれも加古川本流に近い西部域に位置しており、美義川や志染川などを廻った地域では、中期中葉以前にそのような古墳はみられない。

志染地域における古墳は消滅したものも含めると80基近くが存在したと考えられ、その多くは複数基からなる古墳群に属している。こうした中、古墳時代中期後葉から後期には、志染地域を治めた有力者が葬られたと考えられる野々池7号墳・窟屋1号墳・窟屋扇ノ坂古墳が築かれる。

野々池7号墳は全長28mの帆立貝形の前方後円墳であり、その規模的に突出した有力古墳とは言えないものの、墳形や埴輪を持ち合わせていることから、中央との繋がりを持ち志染地域を治めた被葬者で



第14図 志染中梨木遺跡とその周辺

文献記載事項	志深里	高野里	枚野里	吉川里	
弥生	○	○	○	?	
西暦 400		志深里 志染中村 高木古墳群 於菟・真美子 宿見毛倉翁 志染部治織目	高野里 志染中村 高木古墳群 志染中梨木 勝津	枚野里 大池古墳群 年ノ神古墳群 和田神社 正佐寺古墳群 小藏寺	吉川里 西ヶ原 久留美丈ノ越 田云野 年ノ神 大森山 白鳳期 瓦塔片 田中 須磨出 土 日生 瀬
500					
550					
600					
650					
700					
713	風土記編纂開始	志染中梨木 谷		日生 瀬	

注1. 集落跡は、今後の発掘調査によって増加する可能性が高い。
注2. 考古資料の年代記については、近年の研究成果によつたが特例的に変動する可能性もある。

第15図 美濃郡における集落・古墳の衰勢と『風土記』(中久保 2016)

あったことがうかがえる。続く窟屋1号墳は、窟屋川と志染川が合流する志染川南岸の段丘上に築かれた直径約18mの円墳で、横穴式石室を主体部にもつ。金銅装單鳳環頭大刀や貝製雲珠金具を伴う馬具を副葬品に持ち、棺には奈良盆地西南部の忍海地域に多く見られる鉄釘が使用されていることから、屯倉の管理者である忍海部造のような人物が被葬者として想定される。窟屋扇ノ坂古墳は志染川南岸の低位段丘の後背に立地し、窟屋1号墳と同様に横穴式石室を主体部にもつ古墳である。

古墳時代中期の志染地域では、志染丘陵の南側に野々池古墳群や武塚古墳群が築かれ、北側の志染川沿いには弥生時代以来造墓がなされる吉田古墳群・吉田住吉山古墳群に古墳の築造が認められる。先述の野々池7号墳に加え、消滅してしまった武塚2号墳も前方後円墳であったとされていることを鑑みると、古墳時代中期の志染地域の中心は丘陵の南側であったと推測できる。

古墳時代後期になると、窟屋1号墳・窟屋扇ノ坂古墳と丘陵北側の志染川南岸へと有力古墳の造墓が移る。これらの古墳に導入された横穴式石室は、志染地域では野々池3号墳と細目2号墳をあわせた4基が確認されるのみで、前段階での中心地であった野々池古墳群と志染川を繋ぐ細目川の東岸丘陵上に築かれた細目古墳群に導入されているという点も興味深い。

第2節 屯倉前後の志染中梨木遺跡とその周辺

1. 志染地域周辺と志深屯倉

集落と古墳の動向から推察すると、志染地域では古墳時代中期から後期へと社会が変容する時期と前後して、志染川沿いで集落の開発が行われ、丘陵の南側から北側へと中心地が移動したようである。

当地の歴史を考える上で、切り離すことができないのが『播磨國風土記』・『日本書紀』といった文献に遺された記述と志深（縮見）屯倉の存在である。考古学的にその存在を確定させるような資料は見つかっていないが、その一方で窟屋1号墳の調査成果により当地と奈良県忍海地域との関係性が示され、伝承でオケ・ツケ二王子を匿ったとされる縮見屯倉首忍海部造細目（志染村首伊等尾）にあらわされる志染地域の統治者である忍海部氏の存在が濃厚なものになるなど、その関連性への評価も高まりつつある。現在、屯倉の有力候補地としては志染中谷遺跡が指摘されており、合計214m²のグリッド調査の中で井戸状の石組や溝状の遺構が検出され、墨書き土器・漆付着土器・唐草文軒平瓦が出土している。同時期の遺跡としては、掘立柱建物が検出され縁柱陶器が出土した戸田前田遺跡、多数の掘立柱建物が検出され硯や鉄鉢形や葉壺形の須恵器が出土した勝雄遺跡が存在するが、風土記などに地名が残る志染の中心地からは少し離れた位置にある。

ではここで、考古資料とは異なる視点から志深屯倉についてみていく。まず、考古学的にもその存在が濃厚なものとなった忍海部氏忍海部氏とその勢力であるが、隣接する明石郡側の「押部」の地名は「忍海部」の転訛と考えられる点や『日本書紀』で「縮見屯倉」が赤石郡に属しているとされている点から、志染地域は明石川流域の勢力によって開発され、明石川上流部から志染地域までが忍海部氏の勢力下にあった可能性が指摘されている（池田2009）。

また、吉本昌弘によると、美嚢川および志染川の周囲にはN18°～19°Eの方位をもつ条里地割が広範囲に分布しており、これは志染川流域から美嚢川流域へかけて想定される計画古道に沿った地割であるという。こうした中、細目から窟屋にかけての志染川南岸域では地割の方位が異なっており、この偏位



第16図 屯倉前後の志染中梨木遺跡とその周辺

は地形的条件のみでは説明ができず、主条里に先行する縮見屯倉に起因する地割の一部であるという評価がなされている（吉本1983）。考古学的にこの論を裏付けるためには広範囲にわたる発掘調査が行われ、そこで検出された堅穴住居跡の方位などが地割と一致することなどを確認しなければならないが、志染地域における古墳時代後期の有力古墳である窟屋1号墳および窟屋扇ノ坂古墳がいずれもこの範囲に築かれていることは見逃せない。

加えて、坂江渉は志深屯倉を蘇我氏によって整備された「湯山街道」の前身をなす交通路と加古川水系沿いの南北路の開発、およびその拠点的施設として整備・強化された屯倉の一つであると説く（坂江2017）。これは有馬への行幸とそれに伴う交通網の整備を、文献や考古資料などを繋ぎあわせて更に西へと伸ばしたものであるが、裏六甲から加古川への交通路の整備という点において、古墳時代中期段階から既に淡河川を巡る地域へ集落開発が進んでいるという状況や、美義川流域から志染川北岸では計画古道に沿った地割が整備される状況など、提示されている論拠以外にも一致する要素が認められる。

このように、志染屯倉につながる周囲の状況は、様々な視点からのアプローチと研究成果によって解明されつつある。一方で、考古資料から描き出される現象が、必ずしも『播磨國風土記』や『日本書紀』に記された状況と一致することは限らないことには今一度留意しなければならない。特に、現象と伝承には年代的な乖離がみられることや、屯倉やその他の遺跡地として記された志染地域が古墳時代にまで遡って優勢ではないということは明らかにされており、記された地域社会内部の関係が必ずしも古墳時代社会までさかのぼるとは限らず、伝承は“地域社会に遺された記憶の集積を示すもの”である可能性が考古学的な視点から指摘されている（中久保2016）。

2. 志染中梨木遺跡と志深屯倉

さて、ここまで整理してきた状況をまとめると、志染中梨木遺跡は古墳時代中期末頃から後期にかけて志染川の低位段丘上に新たに営まれ始める集落のうちの一つであり、南から張り出した丘陵によって志染川の流れが大きく屈曲するという特徴的な地理的条件下にある。この屈曲点は南の志染丘陵から注

ぐ細目川との合流点でもあり、川を廻ることで丘陵の南側へと抜けることができる。古墳時代中期の段階での志染地域の中心地は丘陵の南側であったと想定でき、これは当地が明石川流域の勢力によって開発されたことに由来すると考えられているが、加えて当地が明石川から押部谷を抜けて草谷川沿いに加古川流域にアクセスすることができるという地理的環境下にあったことも一つの要因となろう。やがて志染川や淡河川沿いで集落の開発が進み、古墳時代後期になると丘陵を超えた志染川南岸地域に中心部が移る。志染中梨木遺跡はこのような時代背景のなかで営まれていた集落であり、窟屋藤本遺跡などとともに当該期における志染地域の中心的な集落の一つであったと考えられる。

古代になるとこれまでより標高の高い山際へと遺跡の分布が推移してゆき、志染中梨木遺跡の北側には志深屯倉の推定地とされる志染中谷遺跡が広がる。このころには裏六甲を東西に結ぶ湯山街道に相当するルートの整備がなされたとの指摘もあり、志深屯倉はその拠点の一つであるという評価もなされている。志深屯倉が交通路の拠点を担っていたと考えるならば、屯倉の選地という観点からも、明石川上流域との結節点、ひいては明石川と加古川を結ぶ旧来の交通路へのアクセスという点で、細目川が志染川へ合流する当地には新旧の交通の要衝の集約点という特徴を見出すことができる。この特徴も、当地を屯倉推定地と評価する要素となりえるのではないだろうか。

こうした環境の中で集落が形成され営まれた志染中梨木遺跡であるが、屯倉の有力候補地（志染中谷遺跡）の前身となる集落遺跡である一方で、屯倉へと繋がるような傑出した遺構・遺物は現在発見されていない。古墳時代後期の段階で当地の中心となる集落がどこであったのか、いかにして志染の地が整備されていくのかを考古学的に検証するには情報が不十分と言わざるを得ない。今後、当地域での発掘調査事例が増えることによって、屯倉やその前段階の集落動態や地域開発の様相が解き明かされていくものと考えられる。これから資料の増加が注目される。

【参考文献】

- 池田征弘編 2009『窟屋1号墳』（『兵庫県文化財調査報告』第353冊）兵庫県教育委員会
岡安光彦編 2000『高木古墳群・高木多重土器1』（『三木市文化研究資料』第15集）三木市教育委員会
是川 長 1970「考古学上からみた三木地方の古代」『三木市史』兵庫県三木市
坂江 渉 2017『志深ミヤケの歴史的位置をめぐる基礎的研究』『ひょうご歴史研究室紀要』第2号
兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
中久保辰夫 2016『播磨国風土記』と考古資料が描く明石郡・美義郡の地域社会』『考古学からみた播磨国風土記』
第16回播磨考古学研究集会実行委員会
中久保辰夫・木村理 2018『地域報告1 播磨』「中期古墳研究の現状と課題Ⅱ～古墳時代中期の交流～」
発表要旨集・資料集成 中四国前方後円墳研究会第21回研究集会（岡山大会）実行委員会
中村直勝 1926「弘計・億計二王隨接伝説地」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第3輯 兵庫県
西岡巧次編 2000『勝雄遺跡1』神戸市教育委員会
兵庫県教育委員会 2011『兵庫県遺跡地図』
三木市教育委員会 1970『野々池古墳群』
三木市教育委員会 1986『三木市埋蔵文化財調査概報』
三木市教育委員会 2001『三木市遺跡分布地図』（『三木市文化研究資料』第17集）
三木市立みき歴史資料館 2018『企画展「志染町の遺跡」鑑賞の手引き』
松村正和・小網豈 2000『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』
（『三木市文化研究資料』第14集・『発掘調査概要報告』第2号）三木市教育委員会
村尾政人編 1992『淡河中村遺跡』淡神文化財協会・淡河中村遺跡調査団
山田清朝編 2011『吉田住吉山遺跡群』（『兵庫県文化財調査報告』第409冊）兵庫県教育委員会
吉本昌弘 1983『播磨諸ミヤケの地理的実体』『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

写真図版



遺跡周辺の航空写真（1964年）



志染中梨木遺跡周辺 遠景（北東から）

写真図版 2



調査前状況（2016年）
(南西から)



調査前状況（2017年）
(南西から)



歩道完成後状況（2019年）
(南西から)

A 地区



A 地区全景（西から）



A 地区 北壁土層断面
(南西から)

写真図版 4



A地区 東壁土層断面
(南西から)



A地区 SH01 全景 (北から)



A地区 SH01 土層断面
(南西から)

B 地区



B 地区全景（西から）



B 地区 柱穴群検出状況
(東から)

写真図版 6



B 地区 SH02・SH03 土層断面
(南東から)



B 地区 SH02 全景 (西から)



B 地区 SH02 土層断面
(南から)

D 地区



D 地区全景（南東から）



D 地区 SH02 東肩 土層断面
(南東から)



D 地区 P24・P25 土層断面
(南から)

写真図版 8

C 地区

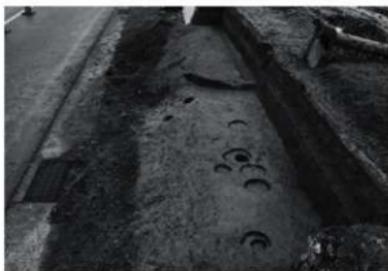


C 地区全景（南西から）



C 地区 土層堆積状況（南から）

E 地区



E 地区全景（東から）



E 地区 SX02 検出状況（南から）

F 地区



F 地区全景（南東から）



F 地区 北壁土層断面（南から）



A地区 SD01 全景（北西から）



A地区 SK01 土層断面（西から）



A地区 SK02 検出状況（南から）



A地区 SK02 土層断面（南から）



A地区 P5・P6 検出状況（北から）



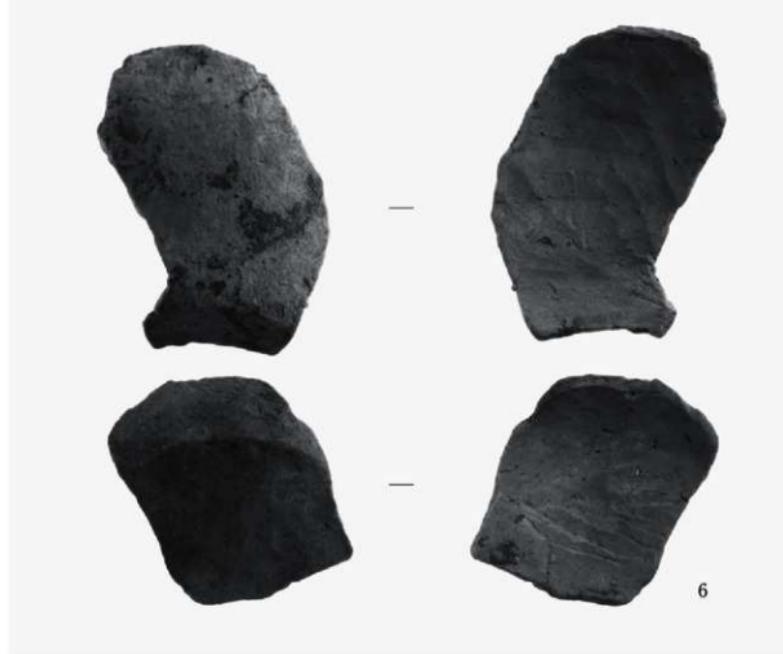
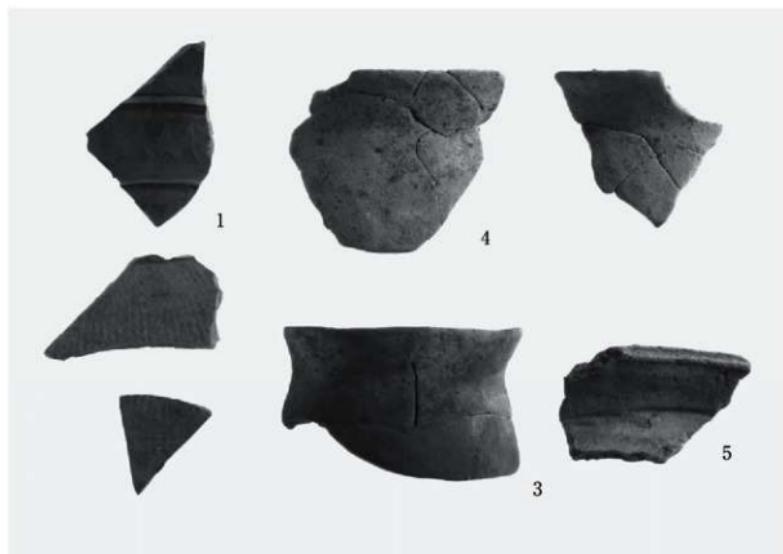
A地区 P5・P6 半裁状況（北西から）



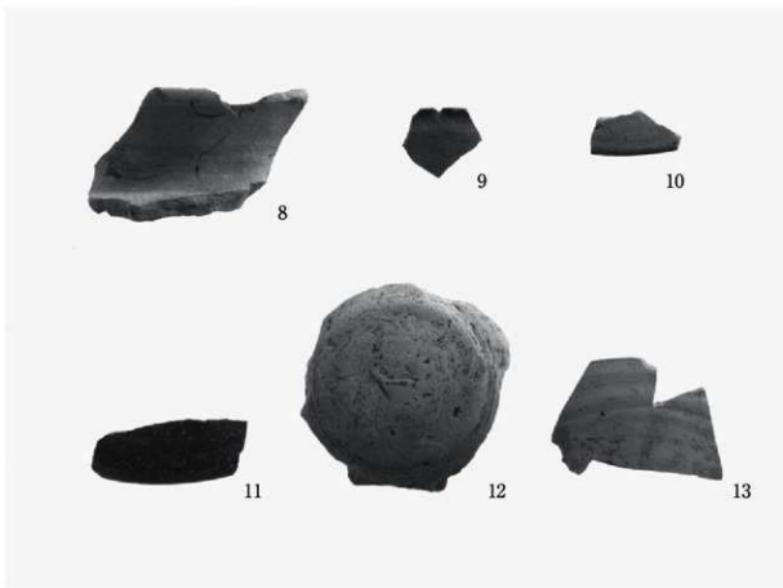
B地区 P9 半裁状況（南から）



B地区 P22 半裁状況（南から）

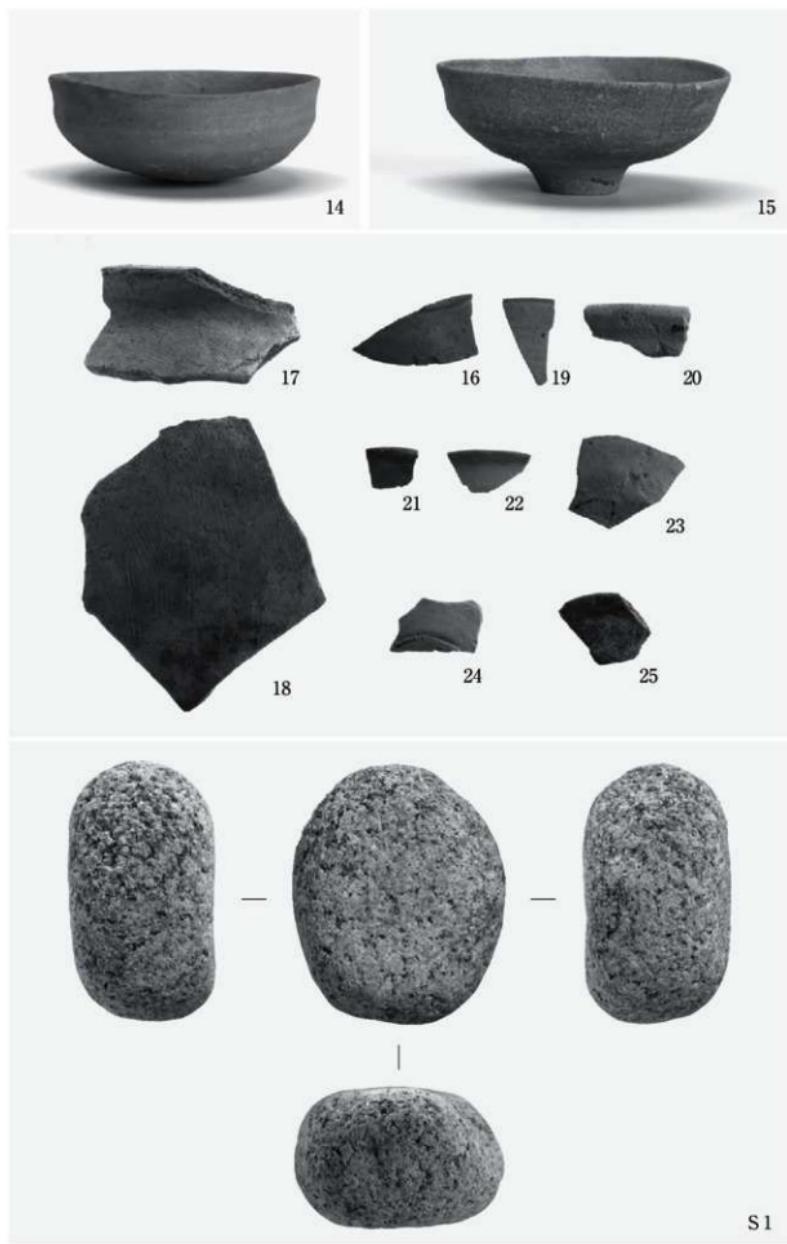


遺構出土遺物（1）



遺構出土遺物（2）

写真図版12



包含層出土遺物

S1

報告書抄録

ふりがな	しじみなかなしのきいせき								
書名	志染中梨木道跡								
画書名	(主)三木三田線道路事故防止対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第511冊								
編著者名	藤原玲史(編)・村上泰樹								
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部								
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561								
発行機関	兵庫県教育委員会								
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-362-3784								
発行年月日	令和2(2020)年3月25日								
資料保管機関	兵庫県立考古博物館								
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589								
所取道路名	所在地		コード		北緯	東經	調査期間 (道路調査番号)	調査面積 (m ²)	発掘原因
			市町村	道路番号					
志染中梨木道跡	兵庫県三木市 志染町志染中	28215	160659	34°47'46"	135°01'40"	20161212～20161219 (2016088) 20180131～20180201 (2017065)	115m ²	記録保存 調査	
所取道路名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
志染中梨木道跡	集落	古墳時代中期後葉～後期	竪穴住居、土坑		土師器・須恵器		段丘間に面する集落の縁辺部		
		古代～中世	柱穴群						
要約	志染中梨木道跡は古墳時代中期後葉から後期にかけての集落道路で、竪穴住居をはじめとする遺構を検出した。志染屯倉や美義郡衙の有力領地とされる志染中谷道路の前身となる集落道路と考えられる。								

兵庫県文化財調査報告 第511冊

三木市

志染中梨木遺跡

—（主）三木三田線 道路事故防止対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和2年(2020)年3月25日 発行

編 集： 公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発 行： 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷： 船場印刷株式会社
〒670-0994 兵庫県姫路市定元町4-2
